



No. 17

The Last Days of Pompeii

特別映画鑑賞会について

フィルム、ライブラリーでは、その事業の一部として、歴史的価値のある芸術性豊かな映画を鑑賞し研究する会を開催しております。今回はその第八回として「ポンペイ最後の日」をとり上げることになりました。

「ポンペイ最後の日」は、現在までに七回ほど映画化されていますが、今回上映のものは、イタリヤ史劇映画の代表作としてアンブロジーオの一九一三年の作品です。

ポンペイ最後の日

映画芸術保存協会蔵

一九一三年伊アンブロジーオ作品

原作 パルワー・リットン卿

監督 アルトワール・アンブロジーオ

——キャスト——

グロウカス…………… ヴイターレ・デ・ステファノ

ニジア…………… フェルナンダ・ネグリ

アルバーセス…………… アントニオ・グリサンチ

アイオネ…………… ユージニア・テットーニ

The Last Days of Pompeii in 8 Reels

Ambrosio's Grand Production

Glaucus……… Signor Vitale de Stefano

Nidia……… Signorina Fernanda Negri

Arbaces……… Signor Antonio Grisanti

Lone……… Signorina Eugenia Tettani

From the Novel by Sir Bulwar Lytton

Directed by Arthur Ambrosio

〔略筋〕 紀元七九年、ローマ帝政華やかなりし時代、ポンペイは商業の中心地として、富と権力と淫逸の中に繁栄した。アゼンスのグロウカスは貴族の娘アイオ

ネと想思の仲であつたが、一日巷において盲目の花娘ニジアを救つて己が館に連れ戻り召使とした。エジプトより来た妖僧アルバーセスはアイオネに邪慾の炎を燃しその機会を狙つていた。淫蕩女ジュリアはグロウカスに横恋慕してその意を遂げるためヴェスヴィアスの山麓に住む妖婆から惚れ薬を購つたが、グロウカスに恨を持つアルバーセスは毒薬と換えた。それと知らず秘かに主人グロウカスを恋するニジアはこれを盗んで彼に飲ませた。そのためグロウカスは狂人となりまたアルバーセスのため辱しめを受けんとするアイオネを救つた彼女の兄は妖僧の手によつて殺害され、その下手人としてグロウカスに無実の罪を着せる。兄は殺され、恋人は捕われて闘技場において獅子の餌食にされようとする。アイオネの歎きにも増して悔恨は盲目の娘ニジアの上にもあつた。その時八月二四日ヴェスヴィアス山は激しく怒り、その噴火によりポンペイは火と灰に埋もれて地獄と化した。ニジアは己が盲目を幸にグロウカスとアイオネを海に逃れしめ、グロウカスは正気に戻つたが、二人の幸福を願つて悲恋のニジアは海中に身を投じ、その生涯を閉じた。

イタリアの史劇映画

イタリア映画ときいて、今日、皆さんの頭に浮ぶものは、ネオ・リアリスモの呼称で一括される「無防備都市」「戦火のかたがた」「靴みがき」「自転車泥棒」などの一連の傑作であろう。そこには戦中戦後の生々しい現実が鋭く描き出されている。しかし、これはネオ・リアリスモという言葉からも、その題材からも明らかかなように、全く戦後の現象である。それ以前のイタリア映画は、いわゆる小国映画なみの扱いか受けない。国際的には全く微々たる存在でしかなかつた時代をずっと遡つて、第一次大戦の前となると、事態はまるで違つていた。イタリア映画は壮大な史劇を金看板として世界の映画界に君臨していたのである。

フランスにおいてフィルム・ダール社が創立され、

芸術映画の製作に意識的な第一歩が踏み出された一九〇八年、イタリアではリットン卿の小説を映画化したアンブロジーオ監督の「ポンペイ最後の日」が現われて世界を驚かした。既成芸術家の協力によるフランス映画の文芸趣味や演劇性に對して、イタリア映画は、大規模な古代ローマ文明に取材するスペクタクル的效果に全く独自の境地を開いて見せたのである。この映画はイタリア史劇映画の黄金時代の先驅をなしたのもとして映画史上あまりにも有名であるが、今回上映されるのは、これではない。多くの奴隸、キリスト教徒の迫害、広大な闘技場などに象徴されるたゞれきつたローマ文明の一中心都市ポンペイを、ヴェスヴィアス山の噴火で滅し去るこの物語は、史劇映画隆盛の波に乗つて、一九一三年にはチネス、アンブロジーオ、パスクアリ の三社によつて、その名も同じ「ポンペイ最後の日」の題のもとに競作されたが、今回上映のものはこのときのアンブロジーオ作品(同社としても二度目だといふことである)。

その頃評判の大作としては、チネス社でエンリコ・グアツツォニが監督した「クオ・ヴァデイス」(一九一三)があつた。映画時間約二時間、当時としては空前の長篇であり、アメリカに輸出されて、当時まだ三分の短篇しか作られていなかったアメリカ映画界に初めて長篇物製作の機運を起させたという曰くつきのものである。これは我が国でも同じ年の秋帝国劇場で封切られて、一次センセーションをまき起した。大作は大作を呼び、「クオ・ヴァデイス」の盛名をしいて、イタリア史劇映画の頂点と目された傑作はイタラ社製作の「カペリア」(一九一三)であつた。これは、当時のイタリア第一の文豪ガブリエーレ・ダンヌンツィオが自らストーリーを書き下ろし、ピエロ・フォッソが監督した一二巻という空前の長尺物で、エトナ山の爆発、ローマとカルタゴの戦争、ローマ艦隊の出撃などの多くの圧倒的な見せ場を持つていた。我が国では大正五年(一九一六)やはり帝劇で封切られ、大評判を生んだものである。